

フィクション劇場 第九話「存在意義」



フィクション劇場（セレクト） 第九話
「存在意義」 大太 大

【はじめに】

○「フィクション劇場」作者の大太 大（お
おた・だい）と申します。つたない作品
にご興味を持って頂き、ありがとうございます。
います。

【フィクション劇場とは】

○作者が世の中で違和感を感じている事や疑問に思っていることなどに対して、「もし、こういう設定や条件になったら、当事者たちはどう動くのか」を考えたオムニバスドラマです。フィルム・バイヤーさんではドラマ部門に全二十五話をまとめて公開しており、それと同様に完全著作権フリーですので、詳細はそちらをご覧ください。マスメディアに少々風が向いている「性根の曲がった社会派ドラマ」で、この第九話はその中から、作者が是非読んで欲しい脚本をセレクトした話になります。では本編をどうぞ。

フィクション劇場 第九話「存在意義」

【登場人物】

小城 涼太（こしろ・りょうた）（47）：日

本サッカー機構 ライセンススマネージャー

島村 康二（しまむら・こうじ）（50）：日

本プロバスケットボール運営協会 執行役

員

加藤 由美子（かとう・ゆみこ）（37）：分

子生物系学会連合会 理事

加賀見 正夫（かがみ・まさお）（67）：日

本ベンチャー連絡会 代表

大内（おおうち）（40）：内閣府参事官

会議の進行役

石原（いしはら）（58）：総理大臣

（オプザーバー）

スポーツ庁 参事官

文部科学省 参事官

（サッカークラブ 社長のみなさん）

フィクション劇場 第九話「存在意義」

学 生 2	学 生 1	記 者 （ 首 相 官 邸 ）	佐 橋	岡 部	浜 崎	高 木	村 上	大 島	小 倉	河 瀬	石 川
-------------	-------------	--------------------------------------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

【あらすじ】

2024年10月、石原首相が世界に向けて発信する日本を掲げ、4テーマを対象に合計4千億円の補助金拠出を表明。分配は、当事者間の協議によって決定することとした。選ばれたサッカーの小城涼太、バスケの島村康二、科研費の加藤由美子、ベンチャーの加賀美正夫が各団体の代表として参加。各々の要求額は約2千億円で、どこも譲らない。期限が迫る中、進行役の内閣府参事官大内は各団体に要求額の半減案を提示する。

小城はスタジアムの例外規定解消のための屋根設置費用として、一カ所百億の20クラブで2千億円としていた。優先順位をつけ10カ所とする案、一カ所の分配を五十億とする案を出す、各クラブから拒否される。

結局、他の団体は一千億円で妥協したが、小城は「サッカーは文化」として譲らない。これを見て、ある学生が「自分たちの存在をアピールする時は金が欲しい時」と呟く。

○首相官邸（ぶら下がり取材）（昼）

石原「本日、2024年10月11日であります。2025年度予算につきまして、内閣の方針である『発信する日本』を実現すべく、日本から海外への発信強化の目的として、4000億円の補正予算の策定を指示しました。臨時国会を招集し、年明けの成立を目指す所存でございます」

記者「詳細はどういう形なのでしょうか？」

石原「今後3年間行うこととし、毎年4テーマ、合計12テーマを選定いたします。テーマにつきましては、分野を問わず、本方針の目的に資するものを考えております。尚、補助金につきましては、短期間・集中的に行い、その配分は、各省庁の縦割り行政を排除するため、選ばれた団体間での協議によって決定することと致します」

記者「今年選ばれたテーマは何でしょうか？」

石原「スポーツの分野から、野球のような世

界的な選手を輩出するべく、サッカーとバスケトボール。科学技術での存在感を高めるために、以前よりご要望のあった科学技術研究費。そして、日本の潜在能力をアピールできるベンチャー支援の4テーマにでございます」

石原が首相官邸から退出する。

○会議１（イントロ）（昼）

大内が誕生日席、大内から右に向かって、加藤由美子、加賀美正夫、左に小城涼太、島村康二が座っている。大内の横には、オブザーバーの参事官が二人。

大内「みなさまお集まりになりましたので、会議を始めさせていただきます。私は本会議の進行役を務めます、内閣府参事官の大内と申します。よろしくお願い致します」

全員、礼。

全員（４人）「よろしくお願い致します」

大内「では、参加のみなさまのご紹介を致します」

大内「日本サッカー機構 ライセンスマネージャーの小城涼太さん」

小城「小城です。よろしくお願い致します」

大内「日本プロバスケットボール運営協会

執行委員の島村康二さん」

島村「島村です。本日はよろしくお願い致します」

大内「分子生物系学会連合会 理事の加藤由美子さん」

加藤「加藤です。よろしくお願い致します」

大内「日本ベンチャー連絡会 代表の加賀美正夫さん」

加賀美「加賀美です。よろしくお願い致します」

大内「あと、オブザーバーとして、文部科学省とスポーツ庁から参事官各1名が同席しております」

二人の参事官、礼

大内「会議に先立ちまして、この補助費を趣旨につきまして、改めてお話し致します。

先般、石原総理が述べた通り、この補助金は短期間・集中的にご活用頂くためのものです。ですので、団体の内部留保や基金としての運用、赤字補填に使ってはいけません。また、活用期間は、テーマのスパンは分野によって差がありますが、原則3年以内とし、必要があれば、以後の計画をご提出頂くことを条件に、最長5年とします」

大内「また、この補助金の多寡で、各団体への別の補助金が影響を受けることはありません。ただ、地方自治体に関しては、地方自治の観点から、独自に判断をされます」

大内「事前に各団体より要望金額をお聞きしておりますが、4団体とも要望額が約2000億円となっております」

大内「また、各団体からご提出頂いた資料がお手元にあるかと思しますので、まずそれに沿った形でご説明頂き、それから議論に

入りたいと思います。それでは、小城さんからお願いできますでしょうか？」

○会議１（最初の説明…小城）

小城「はい。日本サッカー機構の小城です。

ご説明させて頂きます。よろしくお願い致します」

全員、礼

小城「近年、ヨーロッパを始めとする海外で活躍する選手を多く輩出しているのは、私どものリーグあればこそだと考えております。W杯もリーグが出来てから、７年連続で本戦に出場しており、そのレベルの高さは各方面から認められているものだと思います」

小城「トップリーグ全体としては、２０２３年度は黒字ですが、世界で戦う選手を育てるためには、一段の環境整備が不可欠だと認識しております。ですので、本補助金をスタジアム整備に当てたいと考えております」

す」

小城「私どもでは、トップリーグに昇格するための条件として、ホームスタジアムに対して、一定の水準を保つために設置基準を設けております。しかし、その基準が未達のクラブが多いため、制裁として例外規定を設けております。それが20数クラブございます。具体的には、その解消に充てる予定です」

小城「みなさんもお承知のように、日本人メジャーリーガーが打ったホームランが日本企業の広告看板のすぐ横を通り、TVで大写しになったことで、元が取れたんじゃないかという話もありましたが……」

全員、少し笑い。

小城「私どもがいきなりそのレベルになることは難しいと思います。ですが、スタジアムの整備によって、サッカーの試合での広告効果が認められ、さらに広告やスポンサーが付く。こういう好循環になることを目

指したいと考えております。以上です」

大内「ありがとうございます。それでは島村さん、お願い致します」

○同（最初の説明…島村）

島村「プロバスケットボール運営協会の島村です。よろしくお願い致します」

全員、礼。

島村「私どもの団体は、発足が2016年と比較的新しいのですが、発足当初に比べて入場者数は2倍以上になっており、成長が著しい団体です」

島村「みなさんバスケットボールといえばアメリカのNBLという印象が強いと思います」

全員、頷く

島村「実際、世界のバスケットボールリーグの中では、NBLは人気・実力、そして興行面にも抜きん出ており、それに対抗するようナリーグを作るのは難しい」

島村「そこで、私たちは世界で2番目を目指しております。どこかで2番じゃダメなんですかと言って、3番になった方がいらっしやいましたか？」

全員、少し笑い。

島村「私どもは自分たちの身の丈を理解しております。実現不可能な目標は立てません。最初から2番を目指します。世界のリーグで言えば、中国のCBAやヨーロッパのユーロリーグと同じくらいの規模になります」

島村「そのため、私たちは『夢のアリーナ』構想を進めております。お配りしているのは、少し古いですが、私どもも参画している経済産業省のスポーツ未来開拓会議の2023年7月の資料です」

全員、資料をチラチラめくる。

島村「バスケットボールが他のプロスポーツと異なるのは『エンターテインメント性の追求』を掲げている点です」

島村「もちろん、これは遊びでやるということではありません。選手はプロですから。選手はパフォーマンスで魅せる、そして、観客は、そのパフォーマンスを引き出す。その相乗効果を狙ってのものです」

島村「そのためには『夢のアリーナ構想』を実現させることが必要不可欠だと考えております」

島村「ただ、現在は渋谷や島根のチームなどは、既存の体育館をお借りして試合を行っております」

島村「もちろん、これらの関係者のみなさまにご理解頂いて開催できていることは大変ありがたいと思っています。ご協力に感謝申し上げます」

島村「しかし、私どもの『エンターティメント性の追求』には、コート中心の上部にあるセンターディスプレイを始めとする、照明・音響設備が欠かせません」

島村「また、サッカーと同じように、トップ

リーグには、その質を担保するために、アリーナに一定の基準を設けております」

島村「ですが、施設だけに基準を設けても収支が伴わなければ意味がありません。そこで、私どもは売上高についても、12億円以上という基準を設けております。それらを伴ったアリーナの整備に今回の補助金を使わせて頂きたいと考えています」

島村「また、アリーナは多目的で使うことができますので、オリンピックの競技種目や、DJイベントなどの若者向けのイベントも積極的に開催することを考えています。以上でございます」

大内「ありがとうございます。それでは次に加藤さん、お願い致します」

○会議1（最初の説明…加藤）

加藤「加藤由美子と申します。分子生物学会の理事をしております。よろしくお願い致します」

全員、礼。

加藤「科学技術で世界に最もアピールできるのは、なんと言ってもノーベル賞だと思います。これについては異論はないでしょう」

全員、頷く。

加藤「また、ノーベル賞は受賞の栄誉はもちろんのこと、私たちの生活にも恩恵をもたらしてくれています。みなさんに馴染みのあるものと言えば、やはり青色発光ダイオードとIPS細胞でしょうか」

加藤「ただ、これらの研究は一朝一夕にできるものではありません。原理が発明されてから数十年経って花開く研究もあるのです」

加藤「私たちは、その花が開くための芽を摘みではいけないと考えております。かつ、芽を出すためには出来るだけ早く、タネをまく必要があります。それで今回、この補助金での科学研究費助成事業の増額をお願い

いした次第です」

加藤「しかし、芽が出る可能性があるからと言って、全ての研究に均等に費用を出してくれとお願いしている訳ではありません」

加藤「科学研究費には、いろいろ種類がございますが、一般的な『基礎研究』のカテゴリで言いますと」

加藤は手を水平にして、上から順番に下げていきながら、

加藤「S、A、B、Cの4つのランクがあります。これらは各研究者が応募して、審査を経て採択されます」

加藤は再び手を水平にして、上から順番に下げていきながら、

加藤「補助金額はSは最大で二億円程度、以下、Aで5000万円、Bで2000万円、Cで500万円です」

加藤は再び、Sは右手、Aは左手でランクを呼ぶ毎に、その位置を示しながら、

加藤「SとAは重複応募が出来ますが、それ以外は出来ません。つまり、A、B、Cのどれかのみに応募して採択されなければ、補助が全く受けられないことになります。そのため、有望な研究であっても、落選することを恐れて、一つ下のランクに応募しているのが現状です」

全員、頷く。

加藤「また、採択されたとしても、要望した金額の満額を補助して頂ける訳ではありません。みなさんの団体もそうだと思いますが、何かをする際に満額の予算を頂けることは少ないと思います」

全員、頷く。

加藤「私たちは、申請した金額に対して、補助して頂いた金額の割合を『充足率』と呼んでいまして、それが約75%です」

加藤「一番下のランクCは先ほどお話ししましたように、補助金額は最大500万円ですが、採択されたテーマの平均補助額は約

126万円です。これでは1年間アルバイトを一人雇うこともままならないのです」

加藤「ですので、私もはこの充足率を上げることを中心として、この補助金を使ったと考えております。以上でございます」

大内「加藤さん、ありがとうございます。それでは最後に加賀美さん、お願い致します」

○会議1（最初の説明…加賀美）

加賀美「日本ベンチャー連絡会の代表をしております、加賀美と申します。よろしくお願い致します」

全員、礼。

加賀美「みなさん、ベンチャー企業と言え
ば、どの会社を思い浮かべるでしょうか？
月並みですが、GAF Aと呼ばれるIT企
業でしょう」

全員、頷く。

加賀美「創業時期は異なりますが、例えばグ

ーグルなどは1998年創業で、親会社のアルファベットの時価総額は1兆7500億ドルを超えます。一ドル145円とすると約250兆円、日本の国家予算の2倍近くにになります。こういう企業が日本にあれば、国債を買わなくてもやりくりできるのではないかと思うのですが……」

全員、笑い。

加賀美「今でこそ、ベンチャーと言えばアメリカ、というイメージですが、日本でも、古くはパナソニックの松下幸之助さんを始め、ソフトバンクの孫正義さんなど、みなさん、最初はベンチャーだったのです」

加賀美「ベンチャーに求められているのはアイデアを具現化するスピードです。今回の補助金の趣旨である短期的かつ集中的に、目的に沿うものだと思います。早期に具現化し、投資家へアピールして目に止まれば、それ以降の資金が集めやすくなり」

加賀美は両手の指を回しながら、

加賀美「より開発が加速できるという、正のスパイラルを生み出すことができます。そのきっかけを作りたいと考えております。その点、ご理解頂ければと存じます」

○同 議論（科研費、ベンチャーのターン）

大内「みなさんのご説明が一巡しましたので、議論に入らせて頂きます。ご質問のある方は拳手をお願い致します」

小城が手を挙げる。

小城「よろしいでしょうか？」

大内「小城さん、どうぞ」

小城は手元の資料を見ながら、

小城「加藤さんにお伺いしたいのですが、頂いているこの資料は、科学研究費増額の署名活動に使われたとお聞きしていますが」

加藤「はい、そうです」

小城「この要望書は270近い団体が連名となっていますが、署名の方は2万5000筆くらいと聞いています。ですので、研究

者のみなさんは、本件についてそれほど問題にしていないのではないのですか？」

加藤「いえ、私はそうは捉えておりません。

私の周りを含め、いろんな方から増額の要望を聞いているのは確かです」

島村「私からも一つお伺いしたいのですが、この資料の８ページに例として、２０２２年の医薬品が、４・６兆円の貿易赤字であるという記述があります。特に２０２１年から２２年での増加量が多いですよね？これは、コロナワクチンの輸入の増加で一過性のもののように思うのですが」

加藤「はい。そうとも言えるかと思います。しかし、財務省の貿易統計の資料では、『医薬品』という項目までしかなく、それ以上の詳細までは示されていませんので、分けることが出来ません。ですので、このような形にしております。ただ、注釈としてそのページの左に吹き出しで、その旨、記載しています」

小城は加賀美を見ながら、

小城「ワクチンと言えば、大阪のベンチャーが開発から撤退したと聞いていますが…」

加賀美「おっしゃる通りです。ただ、当時ワクチンについては危急を要していましたので、開発を急ぎすぎたのだと思います」

加賀美「この会社もそうですし、特撮で使うようなバイクの開発をしていたベンチャーもそうですが、マスコミのみなさんは話題性や絵面の良さで露出していた感があります。世間の方がそれを見て『やっぱりベンチャーってダメなんだ』という印象を持たれるのは残念なことですよ」

小城はベンチャーの資料を見ながら、

小城「あと、コロナ禍に出されたそちらの提言書の8ページにある『提言5』ですが、『一般中小企業への補助金、助成金、貸付金に対する手続きとは異なる優先的な資金支援を行うことも有効だ』と、あります。これは中小企業支援よりベンチャー支援を

優先せよ、と受け取れるのですが、どうなのでしょうか？」

加賀美「いえ、そういう意味ではありません。その前に書かれていますように『一定の評価がなされているベンチャーに対して』です。つまりベンチャー全てを対象にしてくれと言っている訳ではありません。ですので、中小企業のみなさんをないがしろにしている訳ではありません」

○同 議論（サッカー・バスケのターン）

加藤「私からもご質問したいのですが、小城さん、島村さんとも、主にスタジアムの整備に使うということでしたが、一定の基準があるとおっしゃっていたかと思います。具体的にはどういう基準なのですか？」

小城「サッカーの場合、細かい規定はあるのですが、大きなところで言いますと、観客席が15000席以上、新規でスタジアムを建設する際は、観客席は原則全て屋根を

覆うことが基準となります。既存のスタジアムに対しては、3分の1以上でも満たしていることにしています」

加藤「それでスタジアムの、どの部分がメイ
ンになるのですか？」

小城「屋根になります」

加藤と加賀美は少し、びっくり。

お互いに顔を見合わせる。

加賀美「しかし、小城さん。屋根でスタジアムあたり100億円というのは、金額が大きすぎる気がするのですが……」

小城「いえ、実績から見積もっています。長野のスタジアムで屋根を改修したのですが、その時の費用が約80億円でした。また、現在、クラブのホームスタジアムにしている施設は老朽化が進んでいるところもありますので、立て替えた方が安くなる場合もあります。もちろん、地元の自治体の協力も必要になりますが、九州に新設したスタジアムは、約107億円です。ですの

で、見積もりとしては妥当だと考えています」

加藤「島村さんの方は？」

島村「私どもは2026～2027シーズンから構造改革を行い、リーグのトップは『プレミアムリーグ』となります。その基準で言いますと、収容人数500人以上でスイートルームなどを設置するアリーナが新基準になります。その建設費用に各アリーナに50億円ずつを割り当てたいと考えています」

加藤「アリーナ全体でどのくらいの費用がかかるのですか？」

島村「収容人数にもよりますが、150～180億円、大きなものですと200億を超えます。ただ、その場合は体育館としても使える前提で建設すること、公共性も確保できますから、比較的自治体の協力が得やすいように感じています。私どものチェアマンもアリーナがリー

グ改革の一丁目一番地とおっしゃって
います」

加賀美「…私からしますと、小城さん、島村
さんともやはり1件あたりの金額が大きい
という印象です。いわゆる『ハコモノ』と
違うのでしょうか？」

島村「はい。私の考えでは『ハコモノ』は目
的や見通しが曖昧なまま作ってしまい、お
荷物になってしまった施設という認識で
す。しかし、私どもは目的が明確で、それ
を実現するための施設を作るというスタン
スです。結果として施設が出来上がること
に変わりはないのですが、考え方が逆なの
です」

加賀美「わかりました。ありがとうございます
す。あと、島村さん。私は仕事柄、どうし
ても決算の方に目が入ってしまうのですが
…、バスケはトップリーグトータルで赤字
ですよ？ この補助金は赤字補填には使
ってはいけないことになっていますが、そ

の点は大丈夫なのでしょうが？」

島村「赤字の話をされると、言い換えず言葉もないのですが……」

全員、少し笑い。

島村「先ほどからお話ししていますように、トップリーグでは売上高の基準を設けることにしています。また、現在、収容人数4000人の体育館で行われている試合でチケットの完売が多かったので、試験的に10000人規模のアリーナで試合を行なったことがあるのですが、その際には9600人以上のお客さんに足を運んで頂きました。ですので、赤字を解消するポテンシャルは十分にあると考えています」

小城「ところで、加賀美さん。先程の加藤さんのお話で、『基礎研究』にも将来性を考えて4つのレベルというか、補助金額に差があるとおっしゃっていましたが、ベンチャー支援にもそういう形をお考えなのですか？」

加賀美「はい。それは考えていますが…、考
え方が少し異なります」

小城「…と、言いますと？」

加賀美「最初に申し上げました通り、日本に
名だたる、世界に名だたる企業に育てたい
というベンチャーは比較的投資が呼び込み
やすいのです。理由はシンプルで、大きな
リターンが望めるからです」

小城「確かに上場したら株で大金が、という
話はよく聞きますね」

加賀美「そうです。それは市場原理としては
間違っていないかもしれません、悪いことでもありま
せん。しかし、逆に言いますと小ぶりのベ
ンチャーには資金が回りにくいのです。で
すから、クラウドファンディング方式で
資金を調達しているところもあります。そ
このケアをしてあげたいのです」

加藤「でも、リスクが大きいと思うのです
が、なぜ？」

加賀美「大企業化を目指すベンチャーはいい

意味で野心があります。ただ、中小のベンチャーはそれ以外に別の考えを持っていると感じているからです」

加藤「それは？」

加賀美「『使命感』です。自分たちの技術なり、サービスなりが大企業にならないかも知れないが、必ず世の中の役に立つ、そういう確固たる信念のようなものです。それを資金面でサポートしてあげたいのです」

加藤は加賀美を見る。

加藤「私どもの基礎研究と似ているところがあるのです。『確固たる信念』というところが……」

加賀美は加藤を見返す。

加賀美「……そうですね」

大内「……それでは、今日はこの辺で終わりますでしょうか。概算要求まで時間がありませんので、次は1週間後の開催とします」

○会議 2 ～ 5

（会議 2）小城が手を資料に手をやりながら、話をする。

× × ×

（会議 3）島村が手で四角を作りながら、話をする。

× × ×

（会議 4）加藤が手で丸を作りながら、話をする。

× × ×

（会議 5）加賀美が手を広げながら、話をする。

× × ×

○会議（6回目）

大内「なかなか結論が出ませんね。大臣の方からも、補正予算の概算要求に間に合わせるよう言われていますし、総理も気にしておられます。本来は当事者のみなさんの話し合いで決めることになっていますが、予

算額から大きく超過したままです。ですので、まず、各団体の希望額の半減を目安にご検討下さい。それを持って次回の会議での『話し合い』で、最終決定という形にしたいと思います。よろしくお願い致します」

小城「：」

○会議室（サッカー）

前に小城が座っている。

向かい側に長机があり、各クラブの代

表が座っている。

小城「：と、いうことで、要望額を半分にするよう指示がありました。私としては、今季の成績順に資金の割り当てをしたいと考えていますが、いかがでしょうか？」

石川「小城さん、これから始まる入れ替え戦は反映させるんですか？」

小城「いえ、入れ替え戦の結果は含まないつもりです。自動昇格・降格も同様の扱いで

す。あくまで公式戦の成績です」

河瀬が手を挙げる。

河瀬「ちょっと待って下さい！ この予算は来年度からのものでしょう？　ウチは昇格が決まっています。それなのに反映されないんですか？　納得できません！」

小倉「ウチも入れ替え戦で昇格の可能性があるんですよ？　その案は受け入れられないですよ！」

大島は小倉の方を見て、

大島「小倉さん、入れ替え戦の反映は難しいと思いますよ。１００億がかかった試合となれば何が起こるか分かりませんし、下手をすれば警察沙汰です。機動隊まで出てくるかも知れません。そうなればサッカーのイメージダウンは避けられませんし、最悪、それで私たちへの補助金はなし、となりかねません。反映しても自動昇格・降格のみにするのが穏便だと思いますが…」

小倉は大島の方を見て、

小倉「それなら、いっそのこと公式戦の順位のみが公平でしょう！」

村上「小城さん！ 私は今季の成績のみで判断ことには反対です！ 私たちのクラブは、今は二部ですが長く一部に所属していましたが、リーグの発展に寄与してきた自負もあります！ こういう過去の実績を無視して今年の成績だけで優先順位を決めるというのは納得いきませんよ！」

小城は紛糾を見ている。

小城「：わかりました。では、例外規定が適用されている期間の長いクラブから、という形ではどうでしょうか？」

浜崎「反対です！ 期間が長いってことは、それだけ例外規定の解消を放置してたってことでしょう？ そういうクラブは解消する努力をしていないからですよ！ それに後から参入したクラブが不利です！ とても受け入れられません！」

村上は浜崎を見て、

村上「浜崎さん、そういう悪意のある言い方はやめてもらえませんか？ 努力はしてま
すよ！」

小城は再び紛糾を見ている。

小城は頭を抱える。

小城「…困りましたね。…では、対象のクラブに１００億の半分、５０億円ずつ割り当てることにしませんか？」

佐橋「小城さん、残りの５０億はどうするんですか？」

小城「そこは、地元の自治体などの協力を得る形でお願いしたいと…」

佐橋「仮に自治体の協力が得られずに例外規定が解消できなかったら、どうするんですか？ 最悪、全滅もあり得ますよ？ 国に
なんて言うつもりですか？」

岡部「その通りです！ この話、当然地元自治体も知っています。ただでさえ風当たりが強いのに、『残りの５０億お願い』なんて言える訳ないでしょう！」

石川「そうですね！　うちも既に自治体から補助金の削減を匂わされていますよ。こちらには１００億を当てにして、施工業者の選定も始めてるのに！」

小倉「それに、サポーターが黙っちゃいない！　満額回答じゃなければクラブの力がない、裏切られたと私たちが突き上げをくらうのは目に見えています！　どうしても減らすというのであれば、小城さんが自ら出向いてサポーターに説明して下さい！」

複数「その通りだ！」

紛糾するのを小城が見ている。

小城「…」

○会議（最終）

大内「それでは、会議を始めます。前回お願いしていました補助金要望額の削減について、ご報告をお願いします」

加藤「私どもは削減しまして、１０００億円
でお願いしたいと思います。不本意ではあ

るのですが、これで少しでも科研費が確保出来るならと考え、苦渋の決断をしました」

加賀美「私どもも、当初額の約半額の1000億円を要望します。難しい選択ではあったのですが、投資先をより精査して対応することになります」

島村「こちらにも要望額を1000億円に下げることになりました。国の他の予算には影響しないということでしたので、引き続き夢のアーリーナ構想の実現を国や地方自治体に働きかけて行きたいと思います」

大内「それでは、最後に小城さんお願いします」

小城「私たちは当初の金額を要望します」

全員、小城に注目する。

大内「前回、半額を目安に、とお伝えしたはずですが…」

小城「もちろん、内部で調整をした結果です」

大内「理由を教えて頂けませんか？」

小城「サッカーは文化だからです。エンタメとは違います」

島村が立ち上がる。

島村「ちょっと待って下さい、小城さん。そういう言い方はないでしょう。あたかもエンタメの方が格下だと言わんばかりじゃないですか。失礼でしょう」

小城「エンタメを見下している訳ではありません。サッカーは文化です。文化にお金を出すのは当然だと言っているんです。それにそこらは赤字じゃないですか。赤字の団体にお金を出すだけ無駄でしょう？」

島村は、顔を紅潮させて、語気を強める。そして、資料を持って、

島村「それじゃあ、言わせてもらいますけどね。ドコとは言いませんが、特別利益の名目で毎年、決算の辻褄を合わせているクラブがあるじゃないですか！」

島村は資料を手の甲で叩いて、

島村「去年は14億！　それがなければそっ
ちも全体で赤字でしょう！」

小城も応戦。

小城「特別利益の話は、そちらも同じでしょう！」

島村「ええ、確かにいくつかのクラブは特別
利益を計上していますよ！　でも、それを
差し引いても、それらのチームは全て黒字
ですよ！」

小城も顔を紅潮させて、両腕て机を叩
いて、

小城「とにかく、サッカーは文化なんです！
文化を残していくためには、お金が必要
なんです！」

加藤「小城さん…、それほどサッカーは文
化、文化とおっしゃっているのですしたら
…、文化庁に移ってはいかがですか？」

小城も顔を紅潮させて、両腕て机を数
回叩きながら、

小城「サッカーは、スポーツであり！　文化

なんです！」

大内は手を広げて3人をなだめる。

大内「まあ、3人とも、落ち着いて下さい
：」

島村は席に座る。

大内「：加藤さん、少し言葉が過ぎませんか？」

加藤「すいません：、つい：」

大内「小城さん。他のお三方は、苦しい中ご協力して頂いています。：ですので、要望額の方、もう少しまけて頂くことできないのでしょうか：？」

小城「：」

小城は両腕で、机を叩いて、

小城「：絶対にマケられないんです！」

○エンディング（大学のキャンパス…昼）

学生1「なあ、例の4000億の話、揉めてるらしいぞ」

学生2「そうみたいだな。まあ、おれには興

フィクション劇場 第九話「存在意義」

味ないから、どうでもいいけど」

学生「そんなもんか？」

学生2「そうだ。：でも、一つだけ言えることがある：」

学生1「何だ？」

学生2「自分たちの存在意義をアピールする時ってのは：、金が欲しいときだ」

E
N
D

（2025年6月15日 初出）

（2025年8月1日 単話アップ）